HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青年期における対日イメージの発達的変化 ： 中国の若者の自己認知と他者認知に注目して［全文の要約］
Author(s)	文, 慧超
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14415号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81787
Type	doctoral thesis
File Information	WEN_HUICHAO_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：文　慧超

学位論文題目

青年期における対日イメージの発達的変化

――中国の若者の自己認知と他者認知に注目して――

本研究は，中国の青年期の若者における対日イメージの発達的変化を主題としている。

日中国交正常化を機に活発になった中日間の交流から情報化社会の発展に伴う現代中国までの社会的変化の中で，日本との直接接触経験がほとんどない中国の若者たちは，どのように様々な情報を受け止め，どのような対日イメージを形成しており，その過程はどのようになっているのか。中国の若者の対日イメージを通して，青年期における対日イメージの発達的変化を検証するものを目的とする本研究は，①中国の若者の対日イメージの形成年齢層を知ること，②中国の若者の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす情報源の利用の実態を知ること，③中国の若者の対日イメージの形成過程を解明すること，という三つの目的を設定し，これらの目的のために，対応する 3 つの研究課題を立てて調査を実施した。研究方法としては，混合研究法のトライアンギュレーションデザインを用いた。

第 2 章では，世論調査による全体の分析，対象者の地域，対象者の年齢による全体の傾向から個人へと関連領域を絞りながら，先行研究を検討した。まず，もっとも大きな領域として,マスメディアによる世論を元にした中国人の対日イメージ研究を通時的に,次に,その要素の中から，地域と年齢という対象者の属性別の研究をまとめた上で，主体としての対象者の視点を扱った研究に絞っていった。以上の対日イメージ研究と合わせて，理論的枠組み構築に向けて，認知発達段階論に関する研究に注目して整理した。最後に，以上の先行研究における到達点と問題点をまとめ，本研究の位置づけを示した。

第 3 章の【研究 1】では，研究課題 1 の問いに答えるために，自由回答法により得られた対日イメージと対日情報源のデータから，まずコーディングによりカテゴリーを抽出した。その後，頻出パターンマイニングによる量的処理を行い，対日イメージと対日情報源の実態，その両者の関連と学校段階別の相違について実証的に検証した。その結果，今まで「青年期」と一括りにされてきた発達段階のなかに，中学生と高校生の間にも差異があ

り，中学生の持つ対日イメージと高校生の持つ対日イメージは異なっていたことが検証された。また，その要因を解明するために，中学生・高校生・大学生別の対日情報源を比較すると，まず，中学生の対日イメージの否定的傾向に対する学校教育の影響が明らかになった。また，高校生においては，対日イメージと対日情報源の多様化が確認された。さらに，大学生と高校生の間では，イメージと情報源の多様化している実態は似ていることが検証され，高校から大学への移行段階においては，対日イメージと対日情報源の安定化していく様相が見られた。そのため，中国の若者における対日イメージは高校段階から再構成されていくことが言えよう。しかし，両段階におけるイメージの相違と情報源の相違の程度は，情報源よりイメージの相違のほうが顕著である。従って，両段階におけるイメージの相違は，情報源の種類の相違に由来したというより，イメージ形成の主体である対象者の情報源利用の実態に関わる可能性が考えられる。

第 4 章の【研究 2】では，研究課題 2 の問いに答えるために，まず，先行研究を参考にした上で，【研究 1】で抽出したカテゴリーを用いて質問項目を作成した。次に，選択肢式アンケート調査を行い，高校生・大学生の対日イメージ・対日情報源の平均値得点・因子構造について調べた。それらの結果に基づき，高校生と大学生における因子構造を分析した。その上で，それぞれの対象者の持つ対日イメージと対日情報源の相関関係を調べ，両者の対日イメージに影響を与える対日情報源の特徴を明らかにした。その結果，まず，高校生と大学生のイメージ因子構造の間の類似性と高校生と大学生の情報源利用実態の相違が確認された。次に，「中国にある日本」イメージ因子は全ての情報源と有意な相関が見られなかったという特殊性があり，またイメージの形成に対する「日本の大衆文化」の情報源としての重要性が明らかになった。そのうち，「中国にある日本」イメージ因子と「日本の大衆文化」情報源因子のどちらにも含まれている項目には，「中国の抗日ドラマ」，「中国の抗日映画」と「日本のアニメ・漫画」がある。この三つの項目はイメージと情報源の両方のカテゴリーに含まれているという共通する特徴がある。また，「中国にある日本」イメージ因子は対日情報源と有意な相関が見られなかった「過去の日本の史実をもとにした虚像」である。対照的に，「日本の大衆文化」情報源因子はイメージの形成と最も相関が強い「フィクションの中にある現在の日本」に関する情報を提供している。両者の間の相対的関係は本章での大きな発見であると言えよう。

第 5 章の【研究 3】では，研究課題 3 の問いに答えるために，半構造化インタビュー調査を行い，それを質的分析手法である SCAT を参考にして分析した。まず，中学生・高校

生・大学生は，それぞれどのような思考や推論によって自分の対日イメージを確立したかを考察した。また，【研究 2】では，高校生と大学生のイメージの形成過程には，「中国にある日本」イメージ因子と「日本の大衆文化」情報源因子の間の２つの特徴が共に検証されたため，両者に対する対象者の理解をさらに詳しく考察した。その結果，中学段階では単純化されたイメージの形成から受動的情報処理のプロセス，高校段階では多様化したイメージの形成から能動的情報処理のプロセス，大学段階では安定化イメージの形成から統合的情報処理のプロセスが見られた。また，中学，高校，大学と，「中国にある日本」イメージ因子の中の項目「中国の抗日ドラマ」と「日本の大衆文化」情報源因子の中の項目「日本のアニメ」に対する解釈の深化過程が明らかになった。

第 6 章では，本研究の要約，三つの研究の結果に基づく考察，今後の課題という三つの部分からなる。世論の対日イメージは日中関係などの大きな社会背景の中で動的に変化することが先行研究から分かっているが，しかし，個人の認識に焦点を当てた本研究では，青年期の成長過程における対日イメージは，社会背景にかかわらず，単純化（中学時代），多様化（高校時代）そして安定化（大学時代）の一定のパターンを描くことが明らかになった。また，そのイメージに対する評価についても，「戦争・歴史認識」などのイメージは典型的な認知要素として常に存在し続けるが，成長に伴ってそのイメージに対する評価は単純な否定的評価から両義的な評価へと変化することも認められた。

本研究は，イメージの 4 要素のうちの認知要素と評価要素のみ検証したが，今後，感情要素と行動要素を検討し，それを基に学校教育における若者のメディア・リテラシー教育や異文化理解教育の在り方を探ることは今後の課題としたい。